

脱冷戦と脱社会主義という二つの重要な機軸を中心とした国際社会の歴史の変動は、アジアの将来をも大きく規定してゆくものと思われる。しかしながら、中国の将来という重要な問題をとってみても明らかのように、アジアにはまだ未解決の問題が数多く残されており、きわめて流動的な状況下にあるといえよう。

そうしたなかで、東アジア地域の経済発展とその活力は依然として注目すべきものであり、国際社会の将来にも多大の影響を与えつつある。とりわけ、いわゆるNIEsのなかでもっとも順調な発展を遂げつつある台湾の経済的・社会的影響力は、今日の世界経済の激しい振幅のなかでますます大きくなりつつあり、中国大陸やASEAN諸国に対してはもとより、最近では欧米地域全体からさらに東欧諸国、旧ソ連、モンゴル、北朝鮮そしてベトナムにも及びつつある。

同時に、台湾の政治発展もきわめて顕著であり、そのことは複数政党制の実現、選挙制度の改革などの一連の新しい展開によっても知られている。それだけに台湾の政治改革、憲政改革は今後さらに進展するものと思われ、こうして台湾は、学識豊かなステイツマン李登輝総統のリーダーシップのもとで、二十一世紀に向けての新たな飛躍を遂げようとしている。昨年春にはいわゆる「中国敵国条項」の廃止、国会統一綱領の採択を経て、中国大陸との関係にも新しい一歩が刻まれた。

私たちは、台湾のこのような重要性に鑑み、民間の知的交流の場として一九八九年五月に「アジア・オープン・フォーラム」を発足させ、同年六月下旬に第一回台北会議を、翌年七月中旬には第二回東京会議を開催した。両会議とも、最も高いレベルで日台双方を代表するメンバーやオブザーバーの出席を得て、率直な意見をたたかわせ、相互の認識を深めることができ、内外で多くの評価を得ることができた。

昨年九月十九日から二十一日まで開かれた第三回台北会議には日本を代表する三十数名のメンバー（団長は亀井正夫・住友

【特別寄稿】

台湾の重要性を再考すべきである

中嶋嶺雄

【東京外国語大学教授】



台北中心部。中央に見えるのは中正紀念堂。写真協力：共同通信社

電工取締役相談役、副団長は金森久雄・日本経済研究センター会長、秘書長は中嶋嶺雄。メンバーとしては堤清一・セゾンコーポレーション会長、小林陽太郎・富士ゼロックス社長の財界人、飯田経夫・国際日本文化研究センター教授、日下公人・ソフト化経済センター専務理事、青木保・大阪大学教授らの学者・文化人が訪台し、国際政治や世界経済の今日のような変動期において、日台双方に共通する諸問題を率直に論じあい、また同時に広く全世界に目を転じてアジアの将来を展望することができた。とくに日台双方が今日の世界で共通に取り組むべき課題を探究し、共通の立場でアジアの平和と安定に貢献しなければならないという認識に

到達したことは印象深かった。

今回の第三回会議では東アジアの政治を語るセッションに「一村一品運動」や「地方の時代」で知られる大分県知事の平松守彦氏が出席されて注目を浴びたが、そこには台湾の高雄の県長も来ていた。従来、高雄は大分県と盛んな交流を持っている。一方、大分県はロシア共和国とも関係を非常に強化している。そうすると、台湾→大分→ロシア共和国というネットワークが成立する。これは、これまでのアジアでは考えられないような新しい地域レベルのネットワークである。国連とか、国家外交とか、「一つの中国」とかいった、既成の枠組みを越えた新しい動きであり、ここにも「民際」外交の新しい芽生えがあるといえよう。

今年、日中国交二〇周年で、日中双方がさまざまな慶祝行事を行なう予定であるが、それは同時に日台断交の二〇年でもあるから、台湾との将来をどのように再構築していくべきかと



なかじま・みねお
1938(昭和11)年、長野県生まれ、東京外語大中国科卒業。東京大学大学院(国際関係論)修了。オーストラリア国立大客員教授、パリ政治学院教授などを経て現職。中国研究の第一人者として知られる。著書は「北京烈烈」「香港→移りゆく都市国家」「中国に呪縛される日本」「中国の悲劇」など多数。

いう重要な問題に私たちは直面している。しかも、この二〇年間に台湾をめぐる情勢は大きく変わった。台湾は今や外貨準備高は日本やアメリカを追い抜いて世界第一位、日本の貿易相手国としてはドイツと並んで第二位を競い合っており、もとより日中貿易よりも日台貿易の方が大きく、人の交流も中国よりも台湾の方がずっと多い。しかも台湾の人びとは大変親日的である。

このように重要なパートナーであるにもかかわらず、政府間の国交がないために、これまでは日台交流にもさまざまな制約があった。日本政府・外務省もこの点によりやく気づきつつあるが、このような欠落を埋めることこそ「アジア・オープン・フォーラム」のような民間団体がなすべき「民際」外交の重要な課題だと私たちは考えている。

ところで、台湾の李登輝総統は、アジアでもっとも傑出した知的リーダーだと思われ、「アジア・オープン・フォーラム」参加者全員が等しく敬愛の気持ちを抱いている。私自身は学者としての総統との交流の機会に恵まれ、この正月には旧知の李登輝総統の御家族やごく親しい友人だけの総統誕生パーティーに招かれ、翌日は総統御夫婦と私も夫婦だけで一泊、日月潭に遊んだ。クリスチャンの総統御夫婦は学問と芸術を愛される人格者であり、たとえば西田哲学についての造詣という点でも、李総統に及ぶ学者は少ないであろう。今回も音楽愛好家である総統御夫妻のお宅での夕食後に、台湾の新古典弦楽四重奏団を私のために呼んで下され、台湾の蒐集家の手になるストラディヴァリのヴァイオリンを用意して下さったので、趣味でヴァイオリンを弾く私も御相伴にあずかって、「トロイメライ」と「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」を弾かせていただいた。総統御夫妻にして、このような雰囲気を持つ今日の新しい台湾だけに、私たちは、今こそ、もっとも近く、もっとも親日的な外国としての台湾との関係をいま一度再考すべき時期にきているといえよう。